新聞記者の仕事とは

支局襲撃事件の衝撃

岩波書店編集部編

岩波ブックレット NO.92

PRESS

新聞記者の仕事とは
支局襲撃事件の衝撃

岩波書店編集部

新聞記者の君に……黒田清
新聞のあり方を、今あえて考える……平岡敬
愛着をもった報道を……光岡明
言論の自由と記者の仕事……日高六郎
〈若手記者座談会〉
取材の現場から新聞を考える
一九八一年入社記者A・B・C・D

本文写真提供＝朝日新聞社

岩波ブックレット No. 92

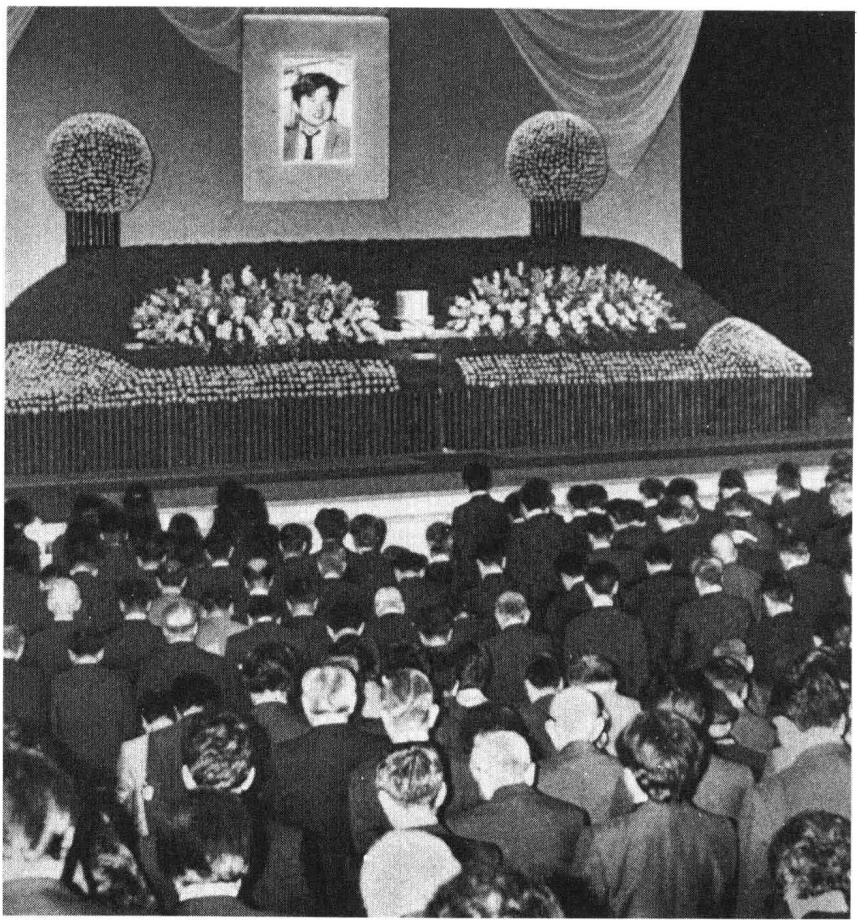
新聞記者の君に

黒田　清

五月十五日、朝日新聞阪神支局にすぐ近い西宮市民会館で行われた小尻知博記者の朝日新聞社葬には、二千三百人もの参列者が集まった。私は二階の一隅に座り、正面の遺影を見つめていた。それはあのいまわしい事件が起きたあと、朝日新聞社からくばられ、各紙に掲載された端整な背広姿のものではなく、支局での仕事中のスナップらしく、ネクタイをゆるめたジャンパー姿でほほえんでいる普段着の写真だった。

それは、なんとも言えない、いい顔だった。そして、そのことが私の今度の事件に対する悲しみと憤りをさらに大きいものにし、私は暗い会場のなかで溢れてくる涙を止めることができなかった。

新聞記者の仕事は、危険な仕事である。さまざまな現場に立ち会うことがある。そして、危険な現場で命を失った記者も少なくない。それは報道にたずさわる者にとって、ある意味では避けられない宿命として覚悟しなければならないものなのかもしれない。



5月15日，小尻知博記者の朝日新聞社葬が行われた(兵庫県・西宮市)

しかし、今度の事件は違う。いま、私の目の前にある小尻記者の遺影の微笑みから連想できるような、支局内でのくつろいだひとときを暴漢が襲ったのだ。しかも、自分は目出し帽で顔を隠し、一言ものを言わずに。

私は、その遺影を見つめながら、二十九歳というこの記者の年齢を思った。大学を出て新聞記者になって五年、この真面目でやさしい心の持主だった記者は、世間知らずのままにやみくもにエンピツを走らせた時期をようやく脱し、やっと自分の判断で、自分の言葉で、自分の書きたい記事を書きはじめたばかりなのだ。

私は、自分が記者になってから五年、または三十歳直前のころどんなことをしていたのかを思い出そうと努力した。それによって、彼の無念さをおしはかりたいと思った。

それは私にとっては昭和三十年代前半にあたる。私の場合、社の事情で支局に出ることがなく、社会部の若手遊軍記者として、あちこちに飛びまわりはじめたころだった。

警察を担当して、一応の基礎的な取材方法を実践のなかで学び、自分はどんなことでも記事にできるんだという自信が芽生えていた。どんな取材も面白かった。一つ仕事をするごとに、それが自分の力として身につくことがはっきりとわかった。

都会の騒音について勉強したのもあのころだ。野球の浪商の暴力事件も一人でやった。山口県の宇部市で暴力追放キャンペーンをやり、震えながらヤクザの親分と会見した。年間の取材とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ては全国の伝説特集の取材のためによく地方に出張もした。教育問題の連載、からだの問題の連載、女子短大の不正問題……。

いくつもの取材風景や書いた記事が浮かんでは消えていく。

私の席から、少し腰を上げると、一階の最前列に、小尻記者夫人裕子さんと、まだ二歳だという一粒種の美樹ちゃんの後ろ姿が見えた。夫人の肩がときおり少し揺れていた。

私の胸は、また痛んだ。この若い家庭の幸せを奪ったのは誰なのだ。

新聞記者の家庭というものには、なかなかだんらんの機会がない。特に若いうちはそうである。まず休日がとれない場合が珍しくない。私も何か月もの間、一回も休まないということはよくあった。自分の仕事はだれにも代わってもらえないのだから、一つの連載企画を担当したり、一回限りではない取材をしている時は、休むわけにはいかないのだ。他の記者が比較的楽な勤務をしていても、それは自分には関係のないことだし、それだけ、自分はだれにもできない仕事をやっているんだという満足感があることも事実である。

また、ある事件の取材に飛び出すと、記者というものは、その取材が終わるまでは家のことなど考えないのが普通だから、子供たちを休日にどこかへ連れて行くという約束はよく破られる。

たまの休日でも、家で原稿を書く時にはだんらんにつながらない。冬の夜、小さい子供が泣い

て原稿が書けない時など、家内はネンネコで子供を背負って団地の部屋を出て行ってくれることもあった。

だからと言って、一家だんらんの時がまったくないわけではない。私のアルバムを見ても、小さな長男を遊園地に連れて行ったり、小学校の運動会で一緒にお弁当を食べていたりする。

しかし、そういう時間というのは本当にわずかしかない。私の長女などは、幼稚園でお父さんの絵を書きなさいと言われると、いつも蛇のように長くなって寝ている男の絵を書いていた。たまの休日には疲れきって、すぐ横になっていたからだろう。

大きなことは言えないが、私はそのあと社会部のデスクをやり、部長をやりながら、若い記者を育てた。そのときに何よりも伝えたかったことは、ただの情報伝達者になるな、ということであった。そして、それは、自分の判断で、自分の方法で、自分の訴えたいことを訴えていくという、当時の自分の姿とだぶらせてのことであった。

小尻記者も、仕事のあいまの家庭だんらんということでは、まだまだこれからのことだっただろうに。奥さんも小さい美樹ちゃんを抱いて、何時に帰るかわからない主人を待つ夜を何度も何度も過ごされたに違いない。

そんな夜、小尻記者は奥さんや美樹ちゃんのことを忘れて取材に没頭していただろう。小尻記者は、亡くなる前、在日朝鮮人の外国人登録法による指紋押捺に関して、警察が強制道具を使っ

て押捺をさせたという事件を追って特ダネ記事を書いたという。もちろん、その他にも、彼だけが書いた記事はいくつもあっただろうが、このスクープだけをとってみても、彼が自分の足で動くすぐれた記者であることがわかる。

新聞記者は、何のために仕事をやるのかと言えば、社会をよくするためということになるだろう。教育者も、医者も、政治家も、サラリーマンも、いろいろな自営業者も、その点では変わらないかもしれない。

しかし、新聞記者は「記事を書く」という作業を中心として、人の心に訴えていくことができる。それによって社会をよくすることができる。それは、別の言い方をすれば、多くの人たちの幸せな生活を守ること、幸せな日常生活を破壊するものと闘うことだと思う。そのために、事件の取材もし、戦争に反対する気持も訴える。それが記者の仕事なのだが、それには与えられる情報を伝えるだけでは駄目なのだ。なぜなら、それでは決して社会はよくならないからである。

特ダネというと、新聞記者が名誉欲とか新聞社間の過当競争の中でがむしゃらに目指すものというマイナス評価がしばしばなされるが、それは間違っている。新聞記者にとって特ダネほど大事なものはない。記者は特ダネを書くことによって、自分を主張できるからだ。小尻記者はなぜ警察官による在日朝鮮人の指紋押捺強制問題を特ダネにしたのか。それは在日朝鮮人の指紋押捺のために、警察が強制道具を使っているようでは、それにかかわる人たちの幸せな生活は守られ

ないし、そういうことを許していては、社会全体がよくならないと思ったからである。

襲撃事件そのものは、指紋押捺の記事を書いたことと無関係だとは思う。しかし、そうであろうとなかろうと、この事件は、自分の主観で訴えたいという新聞記者の根源的なものを破壊しようとする何者かの意志で起こったのであることは間違いない。そして、あの憎い散弾銃によって抹殺されたのは、新聞記者として本格的に活躍するための入口にさしかかったばかりであり、これから社会をよくするために、さまざまな事柄の後ろにあるものをあばき出してくれるはずだった小尻記者の可能性である。そのことが、私には何より悔しい。

私は新聞記者という職業も好きだし、大事な仕事だと思っている。新聞記者そのものも好きだ。だから、今度の襲撃事件にはふつうの事件以上にショックを受けた。新聞社の支局は、一般社会の信頼ということを前提にして、だれでもが出入りできるようになっている。そのことを私たちは特別のことと考えていない。むしろ当たり前のことであり、鍵がかかっていたら、かえって不審に思うようになっている。

しかし、今度の襲撃事件は改めて考えさせる。私たち新聞記者というものは、読者から愛されているのだろうか。信頼されているのだろうか。

新聞記者はつらい商売である。たとえば私たちは取材に関連して、よくこういう非難を受ける。「あなたたちはそれでも人間ですか」。取材現場で、罵声を浴びせられることもある。「君には人

間の血が通っているのか」。

たとえば火事場や交通事故の現場で、泣きくずれる被害者の親に、話を聞こうとするとき、しばしば周囲の目は無言で難詰する。小尻記者のように、心にやさしさを持ち、人の悪口を言ったことがないという記者であっても、そういうことはある。

もちろん、こういう非難は悲しいし、そのように思われることはつらい。「私たちの仕事は、限られた時間の中で、できるだけ真実に近付くことなんです。そのためにできるだけ早く現場に行き、事実がわからなくなったり隠されてしまわない間に、少しでも多くのことを知ることからはじまるのです。それによって、この社会から悪や矛盾や不幸を少しでも減らしたいから、こういう質問をするのです」。そのように叫びたい。そんな若い記者が大勢いるだろうと思うとやりきれない。一人一人の肩を叩いて、頑張れよ、負けるなよ、と言いたい。

私の社会部長時代に、いくつかの大きい事件があった。誘拐事件や人質事件などでは、社会部全員を召集して、全員で取材をさせた。そのたびに思うことは、何日も家に帰らず、事件の中で自分の役割を果たす記者たちの心意気であった。事件そのものよりも、その取材に関わった記者のドキュメントを書くことによって、一般の人たちに、新聞記者はこういうことを考えて取材をしている、こんな気持を持っているということを知ってほしかった。そのために出版したのが三菱銀行猟銃事件を書いた『ドキュメント新聞記者』(講談社)であり『誘拐報道』(新潮社)であり

『警官汚職』(角川書店)だった。新聞記者は、社会の信頼を得るために、自分がどのような考えを持って仕事をしているか、もっと語るべきだと思う。

襲撃事件のあと、朝日新聞社に激励の手紙や電話があいつぐことは、私も予想していた。しかし、同時に本社や支局、通信局への脅迫や無言のいやがらせ電話が決して少なくないということは、予想しなかった。それは襲撃事件そのものとは別に、やはり現代を象徴する事件だと思う。この日の朝もまた、社葬は中止とか、会場に危険なものを仕掛けたというデマが流れたとも聞いた。それは不気味な時代が来たという予感と無関係だろうか。

また「読者の声」欄への投書に年寄りからのものが目立っているとも聞いた。それはやはり、自分たちが体験した昭和初期の不気味な時代の到来を感じてのことに違いない。そういう名もなき人の感覚は決して軽く見てはいけないのだ。

不気味な時代は、言論を統制しようとする。新聞記者の口を封じようとする。だからこそ、これからのジャーナリストは取材力をつけなければならない。不気味な時代の到来というものは、決して抽象的なことではない。必ず具体的な事柄が積み重ねられている。ただ、それらが隠されていて、見えないだけのことである。

その見えないものを見えるようにする。それが取材である。しかし、相手を訪ねて行って、メモ帳を広げて、簡単に見えないものが見えるわけがない。ではいかにして見えるようにするか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それが取材力である。

国家なり企業なり、大抵の組織には隠された部分がある。それが自分を守るためのものなら捨てておいてもいい。しかし自分の〝悪〟を守るためなら、それはあばかれなければならない。もちろん、それをあばくことが社会をよくすることに通じるからである。

日本の新聞は権力に弱いということが、よく言われる。ある意味でそれはあたっている。特に政治権力ということでは、癒着しているとまで言われる。また経済的にも自立していないから、金融資本という権力にも弱い。

しかし同時に、権力が握っている秘密をあばく力、つまり取材力が弱いということも、そう言われる一因になっている。

たとえばウオーターゲート事件はアメリカのジャーナリズムの取材力の強さを現わしている。ジャーナリストの取材力が大統領をひきずりおろしたのである。しかし、日本の場合、どうだろうか。たとえば、朝日新聞阪神支局襲撃事件の起きた六十二年五月、共産党の国際部長の自宅の電話が盗聴されていた疑いで、東京地検特捜部が神奈川県警の現職警察官三人を調べている。これは共産党への違法捜査というようなイデオロギーの関与した問題であるだけではなく、言論の自由に関する大問題である。しかし、一般紙ではこれを一面トップに扱っていないし、独自の取材で、隠された事実を引き出して来たという記事にお目にかからない。出てくるのは、地検が発

表した内容だけである。これでは、新聞記者の仕事が、社会をよくするということにはつながらないし、権力に弱いと言われても仕方がない。

いまのところ、不気味な時代といっても、こういう警察の違法記事を新聞は書ける。また、犬飼兵衛記者と小尻記者を撃ったのが何者であろうと、明らかにさえなれば書ける。ジャーナリストはそのことを大事にしなければならない。事実が明らかになっても書けない時代、そういう時代は四十年余り前に現にあったことなのだし、そこに回帰しつつあるという危機感は、『朝日新聞』に投書する人ならずともあるのではないか。

よい新聞はよい読者によって作られると言われる。しかし、新聞記者はよい読者が生まれるのを待っていてはいけない。自分たちの仕事はよい読者を作ることから始まるのだと考えてほしい。

そのためにやるべきことは多いが、まず自分が新聞記者として、いまの社会に訴えたいこと、いまの読者に訴えたいことは何かを明確にすることである。そして、それを訴えるための取材力、表現力を育てることである。それはよって、自分の主観をこめて記事を書く。記事は読者へのメッセージである。そのメッセージを受け止めてくれた読者が、君にとってのよい読者であり、その読者のために、君は新聞を作るのである。

（黒田ジャーナル代表・前読売新聞大阪本社編集局次長・社会部長）

新聞のあり方を、今あえて考える

平岡　敬

事件のニュースに接した時、「いやなことが起こった」と思った。

新聞社で働く者は誰もが、襲撃という事態を、可能性としては考えている。だから、世の中の激変や、力と力の対立が予想される時には、報道各社は、みな、本社・支社ビルの警備を厳しくするなどの対応をとっている。

しかし、本社・支社のような、いわば〝本丸〟ではなく、町の中で四六時中開かれている支局において、記者二名が散弾銃によって殺傷されるなどと、誰が想像しただろうか。いまの日本で、こんなことが起きるとは、報道関係者ですら思っていなかったに違いない。だが、現実にそれは起こった。

犯人の動機・背後関係など一切は不明なままであるが、いかなる理由によるものであろうとも、この凶行を許すことはできない。若くして命を奪われた小尻記者、目前で同僚を殺され、自身も重傷を負った犬飼記者のことを思うと、悲しみや憤りがまざりあった思いにとらわれる。

しかし、この事件を悲しみのうちに埋没させてはなるまい。もしかすると、何かの予兆であるかも知れないからだ。だとすれば、この事件についてさまざまな角度から考えをめぐらす必要がある。

「朝日」は狙われたのか

犯人が「朝日新聞」を意図的に狙ったのかどうか、真相は不明である。しかし、朝日新聞の支局が襲われたというニュースに、かなり多くの報道関係者が、妙に納得したようだ。まず、この情況そのものに注意をむけておきたい。

近年、マスコミ界での朝日攻撃は熾烈をきわめていた。ある雑誌は、何ヵ月も連続で「朝日はソ連の手先か」などの特集を組んだし、ある新聞社の発行する月刊誌では再三、再四、「朝日新聞の社論は、現実から遊離した平和ボケの理想論である」という趣旨の巻頭言を掲載していた。

もちろん私は、朝日新聞の紙面づくりを一〇〇％支持するわけではない。朝日批判のなかに正鵠を射ているものもあると思う。しかし、攻撃の大半は、議論・討論によって言論を高めていこうとするものとは思われなかった。そうではなく、相手を叩きつぶし、異論を排除するという、破壊的な志向性を感じた。基本的に、購読する側に新聞を選択する自由があるのだから、各新聞社が多様な社論を展開することは正しい。しかし一連の朝日攻撃は、その寛容な雰囲気そのもの

を叩きこわすかのような志向性をもっているように思える。

今回の犯行が朝日攻撃の意図によるものかどうかはわからない。しかし、マスコミ界における破壊的な朝日攻撃とそれを許容する社会的風潮が、「ああ、やはり朝日がやられたか」と多くの人が「納得」してしまう背景にあった。そのこと自体が不気味に思えてならない。「いやなことが起こった」と感じた理由である。今回の事件が、仮に言論・報道への挑戦・威嚇を目的とするものであるなら、マスコミは一致してこれに立ち向かうべきであり、朝日新聞を孤立させてはならない。

日本の「言論の自由」について

つぎに、「言論の自由」と、日本の新聞および新聞記者の仕事をめぐって考えるべきことが多い。

「このような暴力は、言論の自由への挑戦であり、民主主義の根幹を崩すものであって、断じて許すことはできない」――今回の事件について、数多くの社説がこのように論じた。まさしく、その通りである。各社が、社説という正面看板で、このように論じるのは当然のことだ。

しかし、(記者に限らず)新聞を作る側は社説を掲げるだけで事足れりとしてはいけないだろう。事件からそれほど日を経ていないいま、考えづらいことではあるが、かつて新聞作りに携わっていた者の一人として、自省の意味で問題点を指摘しておきたい。

世界的に見ても―現在の日本は、言論の自由がかなり保障されている国である。記者たちも、いやがらせや発作的な暴力にさらされる場面はあるにしても、国家権力による逮捕や拷問、あるいは反政府勢力による誘拐などのテロに脅かされることはほとんどない。記者がこのように安全に仕事をできる国は世界中で日本だけだと言ってもよいほどである。とくに第三世界で働く記者は、文字どおり、命がけの仕事をしていることが多い。はっきりわかった被害に限っても、一九八六年に二〇人のジャーナリストが殺され、一三人が誘拐または行方不明、一七八人が逮捕・投獄されている(米国の民間調査機関〝フリーダムハウス〟の「年次報告一九八六」による)。

日頃、安全に仕事ができることに加え、そもそも言論の自由が与えられたものだという点にも思いをいたしておくべきだろう。銃口に対峙して勝ちとったものではない。日本の言論の自由は、占領下、新憲法によって定められ、一九五二年、日本の独立で占領軍のプレス・コードが消滅して得られたものである。

もちろん、与えられたものだから即ち意味がないと言うのではない。日常的な危険があった方が良いなどと言うつもりもない。言論の自由を享受し、安全に仕事が出来る方が望ましいのは自明のことだ。

だが、戦後、新聞の再スタートの時に言論の自由を与えられ、その中に安住しているうちに、失ってしまった――あるいは当初から欠落している――ものがあるのではないか、と新聞人は常

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com